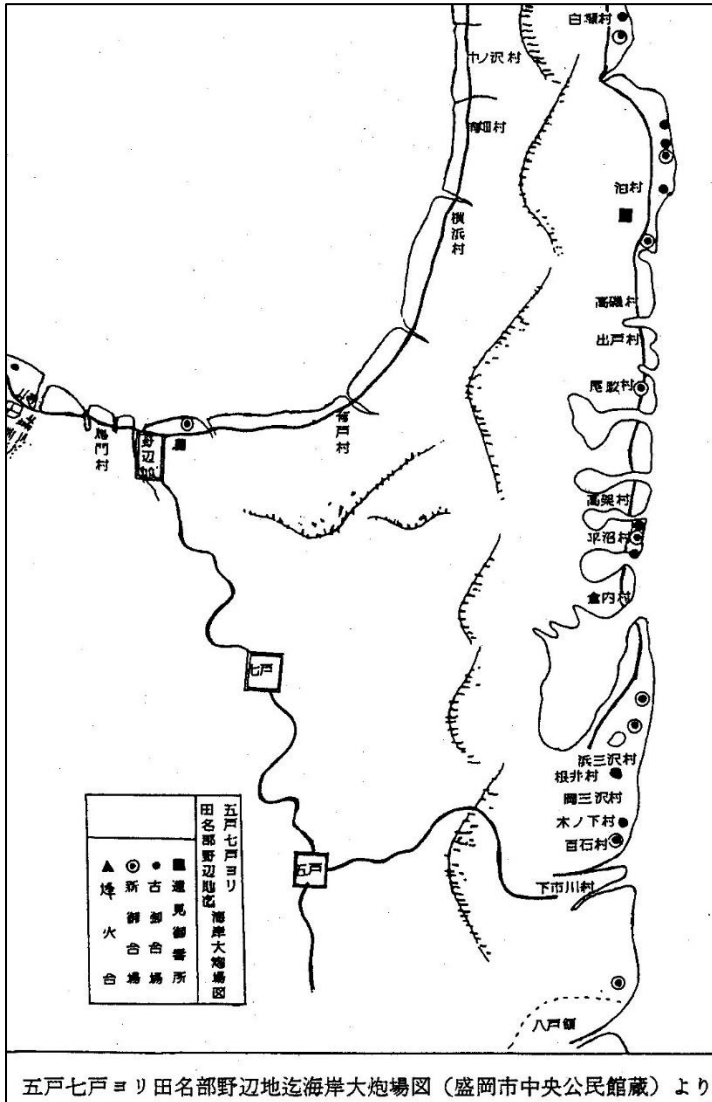


ふるさと歴史散歩「お台場編」



六ヶ所にも
お台場が
あったの？

1 江戸時代の海岸防備：遠見番所と砲台跡



江戸時代初期から北浜街道泊村には、外国船の見張りにあたる浦番所が1カ所、御台場が1845(弘化2)～48(嘉永元)年に築造、1856(安政3)年には新旧合わせて9カ所に置かれていた。

- (1)1644(寛永21)年4月26日以降、盛岡藩は20カ所の浦番改めを行い、同心を派遣している。北浜街道には、5カ所。八戸物見崎、六戸浜根井、東浦のうち泊、田名部のうち尻屋、同所尻労の5カ所に浦番所が置かれていた。
- (2)1699(元禄12)年「郷村古実見聞記」泊ノ崎と中山崎の2カ所。泊村上町六助に御普請申付候。
- (3)1804(文化元)年、南部領全体で10カ所に減り、北浜街道では泊と志利屋の2カ所に減少。
- (4)1808(文化5)年、正月、領内海岸警備の員数を幕府に届けた。七戸浦192人近村の獵夫に鉄砲を交付。非常の場合警備隊に参加させることとした。
- (5)1848(寛永元)年、六ヶ所村のお台場9つ築造。
- (6)1849年(嘉永2)年、七戸代官所の職制に、泊村遠見御番人として3人の御給人が指名されている。
- (7)1856(安政3)年4月、公儀の達に基づき、南部藩主利剛が領内を、漆戸茂樹を共に連れ巡視し、泊、尾駈、平沼で台場を検分(遠浅を批判)。泊の台場では射撃を試み、田名部大間沖では砲艦の演習を行わせ、6月1日に盛岡に帰っている。

(8)1856(安政3)年5月、藩主巡視の帰途の際に、新渡戸十次郎は、藩主の命で、六ヶ所へ引き返し、「海岸御台場築立(中山崎南手・六角・鷲森・平沼南手か)」を行う。(六ヶ所村史上巻II 第18章より)

注1) 南部 利剛(としひさ:1826年～1896年)は、陸奥国盛岡藩の第15代藩主。第13代藩主・南部利済(としただ)の三男。利済のころに築いた華やかな新御殿や津志田の遊郭を廃止。自身の1年間の費用を210両とし、平素は木綿を用い、油を節約するために夜食後は燭台を行灯に換えたと言われている。また北方警備の強化にも努め、守備隊を派遣するなど国事に尽くし、中將に任ぜられた。藩の教育振興にも力を注ぐ。1865(慶応元)年、藩校明義堂を拡張して作人館と改称、文学・武芸・医学3科の教育体制を整備。洋学校日新堂の開設を援助。原敬など明治以降に活躍した優秀な人材が多数輩出された。しかし、藩政再建に関して家老の榎佐渡と、同じく家老で極端な改革を進める東政図(まさみち:中務)が対立するなど、藩政は迷走。1868年(慶応4年)に盛岡藩が戊辰戦争に敗れ、利剛は謹慎を命ぜられて東京へ護送される。そして同年12月に藩主の座を退き、嫡子利恭(としゆき)に家督を譲った。温厚で情義に厚く、茶道や能楽、和歌などにも精通。歌集『桜園集』を残す。(盛岡市HPより)



2 七戸浦の台場と大砲（筒）について 「海岸御台場御筒海岸砲台書」より

海岸御台場御筒海岸砲台書

七戸浦

泊村

- 一、中山崎北手之方
- 一、壹貫目木炮
- 一、同所中程
- 一、三百目唐銅筒(からかねつ)

但割菱御紋付

- 一、同所南手
- 一、壹貫目唐銅筒

泊村館の上


- 一、三百目唐銅筒
- 一、泊村六角
- 一、七百目唐銅筒
- 一、尾駮村鷲森
- 一、五百目唐銅筒
- 一、平沼浜下り戸北手之方
- 一、三百目唐銅筒

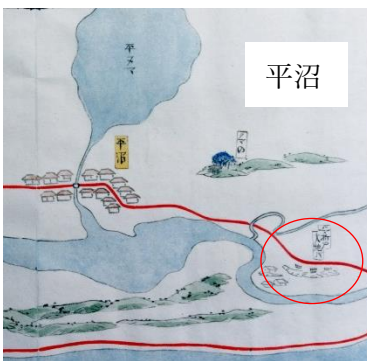
但雲竜形割菱御紋付

四つ車台付なり

長サ四尺余にて能き御筒也

- 一、同所中程
- 一、三百目唐銅筒
- 一、同所南手
- 一、壹貫目木炮

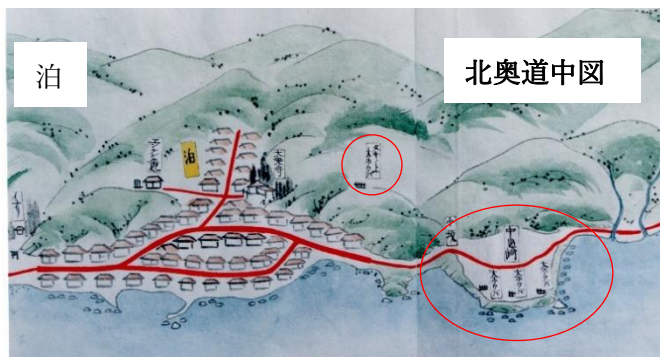




平沼・ハマ折戸大砲場



尾駮鷲森大砲場



館の上大砲場

中山崎大砲場

注2) 北奥道中図とは、江戸時代に作成された陸路あるいは海路を記した絵地図のことである。今日の道路地図と観光案内を組み合わせた要素を持つ。

(1) 筒・大砲について：日本では、洋式銃のように口径ではなく、発射する弾の大きさを「玉目」すなわち重さであらわし区別した。

① 壹貫目木炮について

一貫目玉 (3.75kg) の木製の大砲。一回使って終わり。戊辰戦争では、こうした木製大砲が使われたこともあった。



壹貫目玉唐銅御鑄筒

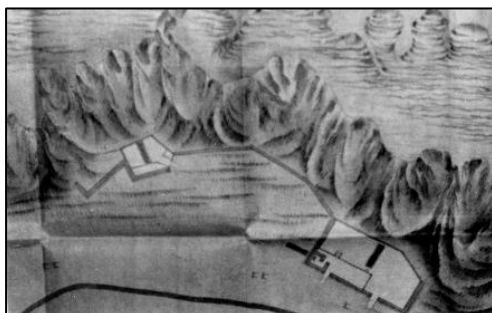
② 三百目・五百目唐銅筒について

種類	総長	砲身の長さ	砲身の内径	材料の青銅の重量
三百目玉唐銅御鑄筒	121.2cm	108.5cm	5.9cm	234.0kg
五百目唐銅御鑄筒	160.6cm	142.4cm	10.2cm	398.6kg



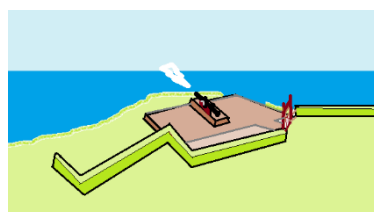
三百目玉唐銅御鑄筒

(2) 中山崎大砲台場之図と想像図

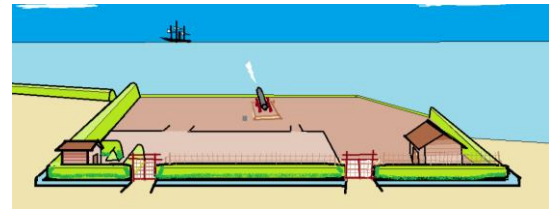


安政3年(1856)改築後の中山崎大ホウバ 南手と中程

六ヶ所村の9つのお台場は、嘉永元年(1848)までに築造され、4か所が安政3年に、新渡戸十次郎によって改築されている。(中山崎南手・六角・鷲森・平沼中程)



中程大砲場想像図



中山崎南手大砲場想像図

3 中山崎ジオサイト見学

～六ヶ所村ジオパーク指定を目指して～

中山崎では、崖や海岸の岩場に、海底火山噴出物が広がっている。凝灰角礫岩や枕状溶岩・岩脈も見ることができる。泊罟層。新生代新第三紀中新世（約2,300万年前から約500万年前まで）は、日本がユーラシア大陸から分離し、日本海が形成され、これに伴う海底火山活動で日本各地にグリーンタフと呼ばれる凝灰岩層が発達した。



新第三紀・鮮新世の古地理(600万年前-300万年前まで)

粕野(1975)による『日本海と大和堆』から

(1) 中山崎の海底火山岩（凝灰角礫岩） ※以下写真は、郷土館職員撮影

水中でマグマが噴出して形成された火山岩や火山砕屑岩が堆積してできた。現地性と再堆積性がある。



(2) 枕状溶岩(冷却節理)・縄状溶岩

枕状溶岩は、チューブ型の玄武岩質の溶岩。

- ① チューブの中が空洞のものもある。外側が冷え固まり、中が流れ出ている。
- ② 急に冷えてできた放射状のひび割れ・冷却節理も見られる。
- ③ チューブの先端は丸くなっている。
- ④ バラバラになって凝灰角礫岩に含まれている。
- ⑤ 溶岩が流れた様子がわかる縄状溶岩も観察できる。
- ⑥ マグマの圧力で殻が破れた跡も観察できる。



激しかった海底火山活動を観察できる。

中山崎のお台場からの眺めは、きれいだね！

